

編集後記

『芸術世界』第17号には6点の論文と5点の作品が寄せられた。多忙極まる教育活動の中で寄稿して下さった方々に心より御礼申し上げる。特筆すべきは日ボ修好150周年記念事業への参加者たちが帰国後ごく短期間で綿密な報告書を仕上げられたことである。この種の報告はスピードが何よりも肝要であり、即時性は読む価値を倍増させる。

今回の表紙は退職される岡村征夫先生が作成して下さった。調べてみると意外なことに、映像学科の教員による表紙の制作は今回が初めてであった。表紙制作者の枠がまた一つ広がったことになり、喜ばしい。岡村先生の凝縮された言葉からは、進取の精神に満ち溢れていた芸術学部発足当時の雰囲気が見取される。

私事に亘るが、17年間の在職中に私は12点の論文を本紀要に掲載させていただいた。紀要は私にとって一種の道場であり、その存在によって、目標を定め努力を継続することができた。紀要には教員の成長を促す場としての役割があり、学会誌とは違う持ち味があるのだろう。これからも『芸術世界』が、新鮮で大胆な発想が生かされる場、敷居は低くて高い水準が確保される場であって欲しい。

「東京工芸大学芸術学部の発足に伴い紀要発刊の運びにいたった。紀要は本学教員の研究教育における日頃の研鑽の成果を収録したものであり、社会の学術文化の進展に些かなりとも寄与することを念願する。」これは当時の本多健一学部長が創刊号に寄せられた巻頭の言葉である。あれほどお元気だった本多先生が、先月26日に急逝された。先生は紀要の出来栄をいつも心に留めておられた。

本多先生はまた校歌の次の文言に本学の建学の精神を求めておられた。「みどりの丘に 光の園に 美と真実を追う心 追う瞳 ああ この窓に 青春の 夢のみをりを ちかおうよ」数年来中野キャンパスは改築の鈍音がかまびすしいが、この建学の理想が新しい学び舎で実現される日が、もう眼前に迫っている。

平成23年3月9日 紀要編集委員長 白 倉 克 文

芸術世界

東京工芸大学芸術学部紀要 Vol. 17

2011年3月31日 発行

編 集	東京工芸大学芸術学部 紀要編集委員会
発 行	東京工芸大学芸術学部 〒164-8678 東京都中野区本町2-9-5 Tel. (03) 3372-1321 Fax. (03) 3372-1330
印 刷	有限会社 啓文堂 松本印刷 東京都新宿区早稲田鶴巻町 565-12